

# アルコール依存症

時計台メンタルクリニック 進藤 隆 先生

「酒は百薬の長」と言いますが、それは適量の場合で、過ぎれば健康を害し、それが長期にわたるとアルコール依存症になります。

「アルコール中毒」という呼び方は、脳萎縮や肝硬変等の内臓への慢性毒性を中心に考えた病名で、「アルコール依存症」というのはアルコールへの身体依存と精神依存が形成されていることで定義する病名です。

身体依存とは手のふるえ・不眠やイライラ・幻覚症状等の離脱症状群(いわゆる禁断症状)が形成されていることです。精神依存とは何かにつけてアルコールを頼ることですが、定義が曖昧で範囲が広がり過ぎる帰来があります。「いつも飲んでるわけではないからおれはアル中じゃない」という人がよくいますが、初期久里浜病院のアルコール治療に関わった精神科医で作家の なだいなだ は「飲んじゃいけない時に飲むのがアル中」と精神依存についての的確に述べています。

アルコール依存症の症状としては、離脱症状群のほか、慢性中毒としての種々の内臓障害と酒乱等の飲酒行動の異常がありますが、その中で最も目につくのは早死にです。山梨県と高知県で行った全く別の調査で、精神病院入院歴のある依存症患者の平均寿命はどちらも52歳～53歳でした。

アルコール治療は極めて明快で『一滴も飲まない』以外にありません。アルコール依存症になってなお「上手に飲もう」とする人が多いのですが、上手に飲める人はそもそもアルコール依存症にはならないのです。

---